黒埼町の人物

第192回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（六十三）

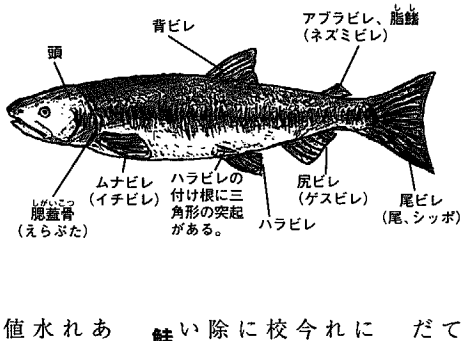
明治三十六年、鮭の回帰性を確認するため、三面川や信濃川、魚野川で稚魚の体の一部を切り取り放流した。

新潟県初めての鮭の人工孵化試験から平場の信濃川漁協大野支部で稚魚の放流が行われるまで

明治三十七年（一九〇四）十一月八日記事「鮭の人工孵化試験（鮭の回帰性のテスト）」

本県水産試験場にては、数年前より鮭の人工孵化試験を行い来り、特に該魚の回帰性を確むる為昨年放流に際し、標識魚として岩船郡三面川において腮骸骨を切削したるもの四千八百匹、北魚沼郡信濃川及び、魚野川において脂鰭を切除したるもの一万匹、合計一万四千八百匹を放流せしが、今後三、四年間を経ざれば勿論該標識魚の溯上するは困難なるべきも、その沿岸河川の各町村にて該魚を漁獲したる時は、その旨至急同場へ報告すべしと。

注　脂鰭はあぶらひれともいって、背びれのうしろにある小さなひれで、人間の盲腸のようなもので、切除しても支障がないといわれる。腮骸骨は下えらぶたの一部を削った。これも大して支障がないといわれた。

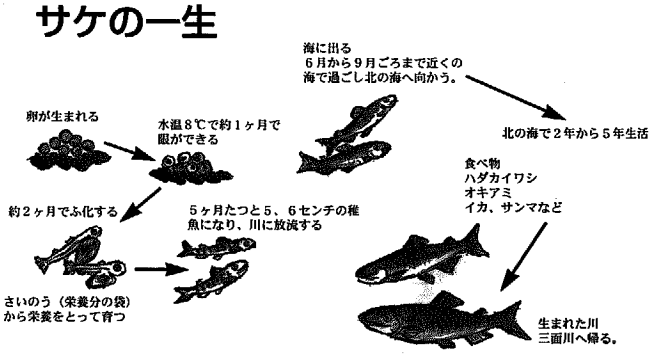


記事によると、新潟県水産試験場での鮭の人工孵化及び稚魚の放流試験は明治三十三、四年ころから始められたようである。昨年度（明治三十六年）稚魚を放流する時、故郷の川に帰るといわれる鮭の回帰性を確かめるため、稚魚の脂鰭（あぶらひれ）や腮骸骨（えらぶた）など魚体の一部を切り取って、三面川に四千八百匹。信濃川と魚野川に一万匹を放流した。この標識魚が川をのぼって来るのは三、四年後と思われるので、これらの鮭を漁獲した時各町村は直ちに県の水産試験場まで報告せよというのである。鮭の稚魚に目印をつけて離したなど、このころまだ鮭の回帰性がはっきりしなかったのだろうか。故郷の川に帰る鮭の回帰率は僅か〇・四％といわれるから、この一万四千匹の稚魚果たして何匹故郷の川をのぼったのだろうか。

この鮭のことについて取材に、村上市いよぼや会館を訪れた。そして、三面川では、今も一年おき位に村上女子高校の生徒たちのボランティアによって、あぶらひれ等を切除した稚魚の放流が行われているという。

鮭の一生（誕生から旅立ち）

水温変化の少ない湧き水のある川底の砂利の中に産卵された卵は、積算水温（毎日の水温の平均を加えていった数値）が二四〇℃で卵の中に黒い目が見えて発眼卵と呼ばれる状態になります。水温が八℃なら約三十日後のことです。その後積算水温が四八〇℃に達すると、頭の部分から酵素を分泌して卵の殻をとかし、孵化します。孵化したばかりの稚魚は体長が二センチ位で、おなかにさいのうと呼ばれる袋が付いていて、約五十日間は生まれた砂利の中でさいのうの中の栄養分だけで成長します。さいのうの栄養分をすっかり吸収し、生まれた時は透明だった体にパーマークと呼ばれる黒いだ円形の模様が現れると砂利の中から浮上し、川の中を泳ぎながら昆虫などを餌として少しずつ成長していきます。海に下る日が近づくにつれてパーマークが消えてうろこをもつようになります。春三月から五月、いよいよ旅立ちの季節です。体に銀色味をおびてきた稚魚は、海へ下り、六月から九月ころまで近海ですごし、それから群れをなして北太平洋へ向かっていきます。生まれた川（母川）から海へ、沿岸から北太平洋へ、目指すは八千キロも遠く離れたアリューシャン海域、ベーリング海です。



（海での生活）

北太平洋を大回遊しながら二年から五年すごした鮭は、大きく成長して、子孫を残すために母川を目指して帰りの旅に出ます。カナダ沖からベーリング海をまわる八千キロの長旅のすえ、秋から冬にかけて母川に戻ってきます。鮭が母川を間違えずに捜し出すことができるのは、母川の匂い（母川物質）を覚えているからです。鮭は孵化後のごく初期に、臭覚を刺激するそれぞれの川に特有な化学物質の中で生活することにより既に終生の行動が規制されて海へと出ていくのです。

（遡上、産卵、死）

母川を捜しあてた鮭は、産卵する場所に到達したときに完熟するように、本能的に時期を選んで、「群来」といって二十尾から三十尾ずつ群れをなして遡上します。三面川では、十月上旬から十二月下旬にかけてのことです。

海にいたころ銀色だったうろこは、河川に入ると次第に婚姻色に変化し、黒ずんだ「ブナ毛」と呼ばれる色になります。（続く）

平成十年四月一日発行（毎月1日発行）四一五号　発行／黒埼町役場　〒九五〇－一一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三－一　電話／〇二五－三七七－三一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用してます。